慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶応義塾後期鉄砲洲時代の意義
Sub Title	The times and the motivation for Fukuzawa's operating a school of his own
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1979
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.2/3 (1979. 6) ,p.1(111)- 26(136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19790600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応義塾後期鉄砲洲時代の意義

河北展生

一

『慶応義塾百年史』（以下『百年史』と略記）によると、草創期として、安政五年冬、福沢諭吉が藩命により出府し、築地鉄砲洲にある中津藩奥平家中屋敷の棟割長屋の一軒を与えられ、此処に蘭学の一小家塾を開いたのが慶応義塾の始りで其後数回塾舎を移転し、今日の三田に移転する明治四年迄を記している。

『百年史』では、塾舎の存在した場所により、福沢が開塾した中津藩奥平家中屋敷の棟割長屋の一軒に居住した前期鉄砲洲時代（安政五―文久元年）、芝新銭座の小家屋に居住した前期新銭座時代（文久元―三年）、再び中津藩奥平家の中屋敷の五軒続の長屋一棟を借用した後期鉄砲洲時代（文久三―慶応四年）、有馬という大名の中屋敷四〇〇坪の地を買受けて此処に移り、塾名を慶応義塾と命名した後期新銭座時代（慶応四―明治四年）の四期に分けている。

『百年史』はその草創期を特に「近代教育の先駆」と名づけたのは、安政五年の開塾当初には、塾名も定かでない小家塾に過ぎなかったものが、慶応四年の春、新銭座への移転を機に、人にも物にも関係のない時の年号に因んで慶応義塾と命名したことの意義を強調するためで、その序説において次の如く主張している。

義塾の二字は新しい学塾の形態を意味する文字で、藩の庇護のもとにある家塾でもなく、塾主個人の講筵を意味する

私塾でもなく、西洋の「共立学校の制に倣い」社中共同の力によって維持経営する学塾という意味を含めたものと思われる。福沢は『慶応義塾之記』と題する宣言書を公にし、その教育精神と組織とを明らかにして天下の青年に呼びかけた。わが国の近代学校および近代教育はまさにここに始まったと称して過言ではない。(1)

右の主張から明らかなように、義塾草創期の動向は、一言にして云へば、藩命により開いた「家塾」から、藩の被護援助を絶ち、近代学塾としての新鮮味を持った一大学塾への独立の動きであったと主張している。安政五年以降十ケ年にわたる動きが、家塾よりの独立運動であることは明白であるが、福沢が何時頃から、また何が故にこの家塾からの独立を考え、動きはじめたかという点については『百年史』は必ずしも積極的説明を加えてはいない。

第一編第一章第四節の「塾舎と塾生」という項目の中で、文久二年迄の学塾は全く文字どおりの一小家塾にすぎず、今日のような発展を約束する要因はほとんど見受られない。義塾発展の「最初のきざしといったものは文久三年（一八六三）と翌元治元年（一八六四）の両年の間にみられる。すなわち塾舎の移転、入門帳の創設、中津藩子弟六名の入塾という三つの事柄である。しかもそれらが互に深い関係を持つているのである。(2)」と記述してはいるが、敢えてこの動きの意義を明確に規定していないのは、なおこれらの事をもって福沢の家塾からの独立運動の発端と断定するのに、多少の疑念が存したためであろう。

塾舎の移転は、参覲交代制度の改革にともない、江戸の家臣の大部分が帰国したため、中津藩邸に多くの空家が生じたので、福沢の借用申込に対し、空家として閉め切りにしておくよりは家屋のためにもなるし、場合によっては、中屋敷の用心の為にも好都合という点から、簡単に借用申込みに応じたということは十分考えられるが、しかし上下二十畳程の二階屋から、急に平家とは云へ五軒続きの長屋一棟へという、大きな建物へ移転しなければならなかった福沢又は義塾側の必然性とはどの様なものであったかについては明らかでない。

『百年史』等の記述によれば入門帳の創設についても、福沢が欧州より帰朝した時は、数名の塾生の出迎を受けたといわれ乍ら、何故に文久三年春の入門生から始めたのか、万延元年アメリカから帰朝後、半ば独学しながら英語を教えていたのが、欧州から帰朝してから、本格的に英語を教える様になったとする解釈には多少の無理が感ぜられるし、特に文久三年の入門者を初筆とする入門帳が、翌年の元治元年六月入門の小幡篤次郎ら六人の中津藩子弟の入門まで、計二八名が同一筆蹟で書かれているという不自然さについては解明出来ず、ここにも大きな疑問がのこる。

第三番目の福沢の元治元年の帰省についても、三月末から六月までの二ケ月程の間、幕府への出仕を休み、また二十名余の在塾生をかかえながら、留守にしてまで帰省しなければならなかったものが何であったのかという点について、これを明らかにする程の理由が説明されていない。以下『百年史』の記述と重複する部分も多いが、これらの疑問点に対して若干の考察を試みたい。

二

『百年史』刊行後に発見された宛名不明の安政五年十一月二二日付の福沢書翰に

小生義も十月中旬着府仕　其後微に江戸の人物にも面会仕候[3]

と述べていることから、福沢の着府即ち義塾の開塾期日が十月中旬であることが明確になったが、同書翰は引続き、

一其後御国元の都合如何に御座候哉　事に依り御出府も可相成哉夫のみ相待居申候　私も何れ三四年は滞府仕候様可相成其内一度は掛御目度事と存候[3]

と述べている。福沢が三・四年は江戸に居るだろうが、そののちはどうなるかは不明だといっているということは、今度開いた家塾を自から担当経営して永続せしめるのだというような積極的な意志はなく、藩命によって開塾をしたまでであ

るという、いわば傭われ教師的な意識しか持っていなかったことを推測せしめるものである。

福沢の出府事情については『福翁自伝』に記されていることが、ほとんど唯一の典拠になっているが、中津藩は嘉永三年七月には、佐久間象山の門に一時に十四名もの藩のおもだった者が入門し、洋式砲術の指導を受け、亦象山の出張教授も受けるという熱心な態度を示したが、その門人の一人で江戸藩邸で用人役を勤めていた岡見彦三が、蘭学好きで、在府藩士に蘭学を教授させるために、松木弘安や杉亨二というような他藩の士に依頼していたが、同藩士福沢が、大坂の緒方塾の塾長をしていることを知り、福沢を呼出したのだという。

福沢の蘭学教師としての実力がどの程度のものであったかは明らかではないが「江戸に行く事は教えに行くことだ」との自負心は持っていたものの、内心福沢は江戸の蘭学教師の実力の程を知るため、間違やすそうな点を特に質問してその実力の程を試したという。前引の書翰で「微に江戸の人物にも面会仕候」と記しているのも、そのことを示しているものと思われるが、右のことは、江戸に多勢いる蘭学者の中では、云はば無名に近い新参の蘭学者であり、その実力から特に著明ではない平凡な蘭学者であったことを示しているように思われる。

鉄砲洲の中屋敷の棟割長屋の一軒が、上下合せて二十畳たらずの広さで、中津藩士と緒方塾の関係者が出入していたというから、入門生数はせいぜい十数名であったろうという推測は、福沢の住居の広さおよび、江戸蘭学界における地位からみて妥当な推測と思われる。この平凡な蘭学者福沢諭吉が、後年の如き有名な人物となり、義塾の発展をみるようになった基本的な条件は、出府の翌年、開港間もない横浜を見学し、其処で通用する言葉は英語であり、蘭語は通用しない事実を経験し、いち早く英語の学習に切替え、英学者として先駆者、開拓者となることができたという福沢の先見性にあったということができる。

福沢が万延元年、木村摂津守に依頼して、その従僕として渡米したり、帰朝後木村の世話で、軍艦操練所ではなく、外

国方に出仕するようになったのも、伊東弥之助氏が主張されるように、[4]いわば英学修業のための行動であるとみるべきであろう。

文久元年、福沢は新銭座の二階建二十畳程の借家に移転している。その移転月日は不明であるが、その移転理由については、幕府外国方出仕者が中津藩邸内に居住するのはまづいからという解釈と、福沢が「旧藩情」に記しているように、当時の中津藩の上下士間のへだたりは、まるで人種の相違するごとく大きく、上下士間の通婚は極めて稀であるという。所が福沢はこの年二五〇石の同藩上士土岐太郎八の娘錦と結婚している。勿論表向の理由は、幕臣福沢諭吉との結婚ということではあるが、然し中津藩士側からすれば、やはり異例の結婚と受止めるのはむしろ自然であろう。したがって新家庭を中津藩邸内におくことは余りにも同藩士より好奇の目を向けられるおそれがある。右のような点を配慮しての移転であるとの解釈がある。

後期鉄砲洲時代に再び中津藩邸内に戻っていることを考えた場合、前者の不都合理由は変化がないが、後者は、中屋敷はほとんど空屋になっていたと推測される点から、後者の理由によるものと解釈したい。

それはとも角として、前期新銭座時代の入門者数も余り多くはなく、前期鉄砲洲時代のそれと大差ない数であったものと思われる。ただ福沢は前期新銭座では、未だ不十分ながら、半ば教えるが如く半ば学ぶが如き状況で英学の教授を始めたようである。

此の年十二月二十日福沢は突然遣欧使節随員の一人として欧州に行くように命を受け、翌々二二日乗船、二三日品川を出帆し、約一ケ年にわたる欧州への旅に出たのである。この欧州旅行が、其後の福沢の成長に多大の影響を与えたことは疑うべくもないが、その具体的内容については、福沢自身は明確に記してはいない。今後の大きな研究課題の一つと思われる。

三

此の欧州旅行中、福沢は四月一一日ロンドンより同藩士島津祐太郎宛に長文の書翰を出している。その中で、

御家おゐても　兼て御軍制御変革　洋学御引立等の御仕組は有之候得共　遅々今日に至り　廉立候義も無之　右は私在府中　彦三殿始　知己の人えは議論いたし候ことも御座候得共　多年姑息の風習　俄に難改　徒に空論に属し申候併今般諸外国の事情篤と相察候所にては　本邦も此までの御制度は無拠も　御変革無之ては相済間敷……御家にても肥前候え先鞭を着けられざる様　大変革の御処置有之度……先づ洋法を採用するには　実地の探索は勿論候得共　迚も壱人にて僅の時日に尽しがたく　後は書籍取入れ候より外手段無之　既に当府ロンドンにて英書も大分相調候得共　尚又和蘭え参候はゞ十分に買取候積に御座候　江戸にて頂戴仕候御手当金は不残書物相調　玩物一品も持帰ざる覚悟に御座候　御在所表にも医学所御取建相成候由候得共　迚も洋書抔御備は未だ出来間敷　私帰府の上は先づ一通り辞書究理書　医書類　其外砲術書等は　御在所えも相揃候積に御座候……先づ当今の急務は富国強兵に御座候　富国強兵の本は人物を養育すること専務に存候　此まで御屋敷にて人物を引立には　漢籍を読を先務と致来候得共……必ず漢籍を読にも在らざることと被存候　大人は中津にて人望を得候こととゝて　事を始候にも稍や容易の御場合可有之　何卒右の件に御考慮被下　可行事候はゝ一日も早思召立　実地に施し用を為し候人物出来候様致度奉存候　右は私帰府の上申上候ても宜敷義候得共　帰帆の期も未だ確と不定　且思付候事に付一日も早くと存じ業と申上候義に御座候(5)

と述べている。

福沢は欧州行の以前から、藩中の洋学に理解ある人々に、中津藩が積極的に洋学を引立る必要のある事を力説していたこと。今度欧州に来てみて、福沢の兼ねての主張が誤りでなく、中津藩が洋学引立のために大変革する必要を痛感したこ

と。したがって中津藩のためにロンドンで英書を、オランダで蘭書を出来るだけ買求めて帰る決心であること。当今の急務は富国強兵を図ることが第一で、そのためには有為の人材を養成すべきであるが、この人材養成は漢学の素養を基本条件とする旧来の方法を改めて、洋学の素養ある人材を育成する必要があること。福沢の帰国後藩に申立てるよりも、一日も早く着手すべきであると思うので、この書翰を書いたのだから、藩の為に出来たら速に実行に移してほしいことの五つの点を主張している。

福沢が中津藩のためにロンドンで英書を、オランダで蘭書を購入して帰国する決意だと主張していることは、人材育成を漢学より洋学を以て行うべきだと主張していることとあわせて考えると、漢学では欧米に対応する人材が育成されないことを主張していることを示すものと考えられる。しかも英蘭書をともに求めて帰るということは、中津藩では福沢を除いて英語の出来る教師が居ない現実からみて、英書は自分が教育するため、蘭書は国許中津の医学所を中心とする蘭学教育のためとの考えであった事を知り得る。

英蘭いづれの教育でも、漢書による教育よりも必要であると主張しながら、現実に英蘭両書を買求るという事は、蘭書よりも出来れば英書の教育の方が望ましいとの考えがあることを示すもので、その英学教育は福沢自身が担当するから、藩は一大改革をして洋学校振興に力を入れるべきであると主張しているということは、福沢がこれまで開いて来た「一小家塾」ではなくて、藩校或はこれに準ずる相当規模の英学塾の必要を痛感してなされた意見具申、とみなければならない。

福沢が藩の中で有力な島津祐太郎に英学藩校の設立を強く建言したのは、今度の欧州旅行で、教育が富国強兵の基本的条件であることに気附いたためで、然も早急に人材養成をする必要を考えた場合、従来のような福沢の家塾程度では、入門して来る学生の数も僅少であり、十分の効果は期待出来ないから、藩校を洋学校とする程の大変革を断行し、一日も早く、出来るだけ多数の洋学素養のある人材を養成する必要を痛感したためによるものと推測される。

福沢は欧州旅行中しば〳〵各国の学校を見学しているが、学生数や教員数、進学制度等、教育制度に関する諸点に注目しているのも、右の様な考え方が強く念頭に存したためと思われる。

島津祐太郎宛の前引の書翰で福沢は

漢籍も読様にて実地に施し用をなし不申適例□太夫　桑名太夫、今泉郡司殿　此三士は年来漢書を読　実地に試候所絶て用を為さず(5)

と実名を挙げて漢学の役に立たぬ点を明言しているし、慶応三年二月六日付の島津宛の書翰では、

中津に文学の教なし　世間見ずの田舎風にて　才も不才も門地を以て無上の天爵と思ひ　世間普通の道理を知らず才ある者は狡猾姦佞に流れ　才なき者は頑癖固陋に陥り　人々己が所業を好き事と思込み更に一和することなし。(6)

等と激しい言辞を以て中津藩の悪弊を列挙している。

このような内容の書翰は、余程相手が信頼出来る人物でなければ差出さぬものである。とすれば、福沢は島津祐太郎に絶大の信頼をおき、その本心を吐露しているということになる。したがってロンドンよりの書翰の、福沢が、何とか藩が洋学校振興に積極的にのりだすべきだという意見は、福沢の本心であり、福沢は自らの一小家塾を廃して、中津藩校としての英学校の中心教員として、中津藩士の教育に当る強い意図を持っていたことを示すものと云ひ得るようである。

四

福沢は文久二年十二月一〇日品川に帰着し翌一一日上陸している。前記島津祐太郎宛書翰で述べているように、福沢は早速中津藩が英学校を創設すべきであるとの意見を関係者に入説したものと思われるが、福沢の留守中、中津藩をめぐる情勢が大きく変化し、とても福沢の希望が実現されそうにもない状況になっていた様である。

文久二年閏八月二二日、幕府は参覲交代制度の改革を断行し、諸大名を四年に一度、在府期間百日の制に改めるとともに、人質的に江戸在住を義務づけられていた大名の妻子の国許居住を許すこととした。従来大名の生活は江戸が本拠であるような状況であったため、家臣及びその家族も、相当多く江戸定府或は勤番として、江戸に居住し、中には数代にわたって国許にも帰らないという者も居るほどであったが、今度の改革で、大名の家族が国許に帰国し、然も二年半以上も江戸に居ないということになれば、江戸藩邸はいわば大名の生活の本拠から、一躍江戸出張所に縮少され、大名の在国中江戸に居る家臣の数も極めて少数になってしまうことになる訳である。

奥平家の場合は、文久二年江戸城本丸大手門守衛が命ぜられ、更に同年十一月二四日には西丸大手門の守衛も命ぜられたため、直ちに参覲交代制度の改革によって家臣団が国許に引揚げるということはなかったようである。

文久三年春、京都の圧力に抗し切れない将軍が、公武合体のためということで、三代将軍家光以来中絶していた京都への上洛を再開した。幕府では京都が過激攘夷派の支配するところとなっていることから、出来るだけ将軍の滞京期間を短くしたいとの考えから、文久三年三月一三日、中津藩に対して両大手門の守衛を免除し、代りに将軍江戸東帰の道中警備の為にということで、将軍出迎えの為の上京を命じた。そこで中津藩主は、早速相当数の警備用員を伴なって上京することとなり、三月一八日江戸を出発し、四月二日京都に到着した。

ところが京都では将軍を長く京都に留め、幕府の権威をおとすことを図り、将軍に東帰の許可がないばかりか、十万石以上の大名をして京都を交代守衛させるということになり、丁度上京していた中津藩に、四月一八日最初の京都守衛が命ぜられ、四―六月の間京都守衛の任務につかされることになってしまった。中津藩にとっては、大手門の警衛といい、京都の警備といい、誠に予想外の大物入りが続いたわけである。

京都警備の任を終えた中津藩主は、六月二四日大坂より乗船、直ちに帰国している。(7) 京都に随行した家臣達も奥平侯と

共に中津に帰国している。この藩主一行の帰国と前後して江戸の家臣や家族達も中津に帰国して来たようで、中津市立図書館所蔵の町方記録の一つである『文久三年御用控』七月条に、帰国家中で親戚無き者に対して、藩より旅館宿泊代として「一日に銀札一人前二匁一分宛五日之間は上より御賄被下候得共雑費は町弁に致候様被仰渡候　一、六日目より御引越之御方と宿主と旅籠之所相対に致候様被仰付候」との触が出されている。此の間に借家なり借間なりを探し出せという事の様である。同記録によると、八―九月にかけて家中家族の引揚が行なわれた事を知ることが出来る。[8] したがって中津藩家臣やその家族が江戸を引払ったのは七―八月頃と推定される。

とに角文久三年三月、中津藩は京都警備のため相当数の家臣が上京し、更に七―八月には家族達が帰国し、中津藩々邸は急に火の消えた様な状況になったことと、前年からの西大手門の警備と引続いての上京は、いづれも臨時の課役であり藩の支出は極めて大きく、それらの点を考えるとき、福沢の建言はたとえ尤な事であっても、それを実施し得る見込が立たないという情況であったと思われる。

また『中津藩史』によると、[9] この年「亥年の建白事件」と称する藩内紛争事件が発生している。即ち国許の下士水島六兵衛ら下士十数名が、各藩の多くが藩制改革を断行しているのに、独り中津藩のみが因循として旧態を改めることのないのは、江戸詰家老の奥平壱岐が原因であるとして、文久三年正月頃より相談し、三月十五日に奥平壱岐弾該の建白書を、国許家老の奥平図書に提出した。中津藩では早速重臣評議の結果、水島等を説諭したが、聞きいれず、直接出府して藩主に直訴すると主張する勢であった。しかし懸命の説得の結果、水島等の出府だけは中止させ、代りに目付服部五郎兵衛が奥平壱岐弾該文を丁度上京している藩主の許に提出し、同じく家老奥平図書と生田四郎兵衛が上京し、藩内事情を報告協議することになった。其の結果奥平壱岐の家禄を召上げると共に、水島ら十五名の下士も、各家禄二石を削減するということで一応解決したという事件である。

奥平壱岐は、福沢が最初に長崎に出た時に、壱岐の親戚である光永寺に一時一緒に居たこともあり、必ずしも好感を持っては居ないが、壱岐も或程度蘭学を学んでいるだけに、欧行の前後福沢の主張した洋学振興策に、或は何等かの理解を示す可能性がある。したがってこのような藩内紛争は、福沢からみれば、中津藩をして洋学振興策をとらせるためには、障碍となる条件の一つと考えられる事件であったかもしれない。

五

文久三年福沢は芝新銭座の小家屋より、再び築地鉄砲洲の中津藩奥平家中屋敷に移っている。後期鉄砲洲時代の始りである。しかしその移転の日時については明らかではないが、福沢の恩師緒方洪庵が前年八月幕命で江戸に呼出され、西洋医学所頭取兼奥医師を命ぜられたが、文久三年六月十日下谷御徒町の医学所頭取屋敷で突然咯血の為の窒息で急死した。恩師急病の報に取るものも取りあえず、新銭座から下谷まで駈けつけたという。また長男の一太郎は十月二日鉄砲洲で生まれている。したがって六―十月の間に鉄砲洲へ移転したのであるが、前述したように、中津藩士及その家族の大部分が江戸を引払ったのが、七―八月と推定されるから、おそらくその後、八―九月頃に移転したのではないかと思われる。

ところで、福沢が出府した安政五年頃から世間は次第に攘夷論が強まり、世間の空気も何となく殺伐となり始め、出府直後の十月二三日には、福沢の緒方塾の先輩である越前藩の橋本左内が町奉行所に召喚されて居るし、万延元年咸臨丸で渡米した時には、伊井直弼が桜田門外で殺されるという事件がおこっている。文久二年ころから攘夷派の行動は一段と強まり、テロ行為も頻発する時勢となっていた。現に文久二年十二月、福沢が欧州から帰国した頃は、丁度三条実美姉小路公知らの攘夷別勅使が、幕府に攘夷奉勅を迫るために東下し、一応目的を達して十二月七日江戸を発して帰京の途についた時であり、十二日には高杉晋作等が御殿山に建築中の英公使館を焼討している。また十九日には政治総裁職松平春嶽の

御抱儒者として有名になった横井小楠が、熊本藩士に襲撃されて危く脱出するという事件が発生しているが、更に洋学者仲間で蕃書調所の教授をしていた手塚律蔵が、長州藩の招聘に応じて同藩の蘭書会読に加わり、兵事造船等の諮問に応じていたが、十二月二八日には藩邸の帰途を襲われ、日比谷外の濠に飛び込んで命だけは助かり、佐倉に潜んで瀬脇良弼と変名していたという事件が発生している。このことは同じ洋学者仲間の事だけに『福翁自伝』にも「いよいよ洋学者の身がはなはだ危くなってきた」と書いている程である。

他方文久三年には、生麦事件の賠償金要求がなされ、その支払に反対する京都側攘夷派の圧力の前に、幕府は償金を支払うことも出来ず、そのため英国との間に険悪な空気が流れ、外交事情を知る立場にあった福沢も、いよ〳〵開戦必至と考えて、疎開の準備をする情況であったが、五月九日小笠原長幸の独断という形で償金が支払われるという、いわば攘夷一辺倒の時代であったといえよう。

この様な攘夷気運の強い、洋学者にも志士達の狂刃が向けられるという時勢の中で、福沢は再び中津藩の中屋敷に移転をしている。然も今度借りた長屋は、五軒続の長屋一棟で、奥の二軒分を福沢の住居とし、残る三軒分を塾舎に当てたもので、部屋の大きさは『百年史』によると、十畳か十二畳のものが二室と小部屋が五つ六つあり、他に板敷の食堂があったといわれており、一軒分が約一五坪前後の大きさであったらしいと記されている。上下二十畳程の小さな借家から、洋学者も何となくひっそりとした生活をしなくてはならない様な風潮の中で、一挙に五軒続きの一棟に移転したということは、異様な行動の様に考えざるを得ない。

中津藩としては、家臣達が大部分国許に引揚げて空屋が多くなったから、空屋にしておくよりもということで福沢に貸すことは、あり得ることであるが、借りた福沢の立場から考えた場合、攘夷論旺盛の時勢だけに、志士達から危害を加えられる危険性があるこの目立った行動は、暗殺をおそれ、用心深く立廻っている福沢にしては、何か特別の意図を抱いて

いたがため、敢えてこの様な移転を断行したものと推測せざるを得ないように思われる。

六

福沢は元治元年三月二三日江戸を発して中津に帰省している。この帰省について『福沢諭吉伝』は次の様に述べている。

今度は六年振りの対面で、しかも先生は遊学の目的を達したのみならず、家を成し名を成し立派に立身してから始めての対面であった。母子の感懐如何であったかは想像するに余りあるであろう。而して先生の帰省は母堂を慰むると共に、同郷の小壮子弟を江戸に伴ひ帰るという考えがあったから、先づ藩士の二三男で家事に係累のない子弟を物色して、第一に目を着けたのは小幡篤次郎である。……篤次郎は藩儒野本三太郎等に就て漢書を学び、其時は二十三歳で、進修館といふ藩の学校の教頭のようなことをしていた。野本は先生より相談を受けて第一に篤次郎を推挙したところ、篤次郎は純粋の漢学書生であったから、洋学修業などは思ひも寄らぬというて姿を隠してしまった。依って先生は更に服部五郎兵衛並に竹下郁蔵に相談した。……両人は篤次郎を探し出してこれを呼び寄せ、先生と共に洋学修業の必要なる次第を懇々説いたので、漸く納得して江戸に出ることになった。(10)

右の様に今回の帰省の目的は、安政五年藩命に依って江戸に出ることになった時に、大坂から一度帰省して出府して以来、まさに六年振りの帰省で、その間万延元年にはアアリカに半年、文久二年にはヨーロッパに一年の海外旅行をして来た。この旅行だけでも母親に掛けた心配は大変なものである。ということで、久方振りに母親に元気な所をみせるという親孝行が一つと、小幡篤次郎ら中津藩子弟を江戸に伴い帰るという二つの目的からの帰省であるという。

しかも後者については、まづ帰省して藩儒野本三太郎に相談したところ、小幡篤次郎がよかろうと推薦を受けたので、篤次郎に会って勧誘したが、篤次郎は、今更見ず知らずの洋学などをやる気は毛頭ない、江戸に行くことは嫌だと云って

姿を隠してしまったのを、篤次郎の親戚の人達の助力を得て探し出し、説得の結果、ようやく江戸行を承知したのだと説明している。即ち六年振りに母に会うために帰省したとき、野本三太郎に、中津藩の青年の中に唯れか江戸に出て英学という新らしい学問を修業してみようというような者は居ないかと相談したところ。たま〳〵小幡篤次郎を推薦されたので、篤次郎を説得したということの様に記されているが、それにしては嫌がる篤次郎を、伯父まで動員してようやく説得しているその熱心さと、何か喰ちがうものがあるように思われる。

また小幡家は篤次郎の父篤蔵が縁辺事件と呼ばれる藩内紛争で若くして隠居を命ぜられた時に、[11] 未だ男子が無かったので、妹を養女としこれに婿を迎えて小幡家を相続させた後で、篤次郎らが生れている。然も父篤蔵はこの時既に死亡している。[12] 福沢は篤次郎を説得した後、母の篤蔵未亡人に、実子篤次郎及びその弟の仁（甚）三郎の二人の江戸遊学の了解を求めるため、江戸では養子の口が多いからと云うことで説得したと『福翁自伝』に記しているが、如何に封建時代のことで、我子の養子先のことが心配であるとは云え、未亡人が実子二人共を一度に手放すことを簡単に納得したという点にやゝ疑問が残る。

確かに福沢は幕府に出仕し、旗本の様なものに立身して居るし、欧州行の際受取った金の中から、百両という大金を中津の母親のところに送る程の立派な人間ではあるが、然し中津の小幡篤蔵未亡人にしてみれば、福沢はやはり十三石二人扶持の福沢である。この福沢に、腹を痛めた実子二人共を預けて遠く江戸に送り出す。その江戸は今まで多くの藩士が交替で勤番していたのが、世情が変ってその大部分が引揚げてしまっている。その様な所へ送り出すという決心は、簡単にはつかない。然も篤次郎が強く希望し喜び勇んで行きたいというのならまだしも、嫌って一旦は姿を隠したのを、ようやく説得したという状況であるなら、女親として賛成することはまずあるまいと思われるのに、二人迄も手放すことを承諾したという点に、何か特別の条件が存したのではないかとの疑念を抱かざるを得ない。

七

中津市立図書館所蔵の「中津藩士家系」に、嘉永三年書上のものがある。上士の家系に関するもので、子女の婚姻先まで記されて居るが、残念なことに上士階級に限られ、然も家中全部は残されて居ない。下士階級については、所謂勤書で各家の当主が代々記されているのみで、姻戚関係は明らかでない。

元治元年六月、福沢は小幡篤次郎・同仁三郎、浜野丑之助、三輪光五郎、小幡貞次郎、服部浅之助の六名を伴って江戸に帰っているのであるが、後述する慶応義塾の最初の入門帳によると、この六人より一年早い文久三年初夏入門ということで、和田克太郎・同慎二郎、小幡杏平という三名の中津藩士の氏名が記されている。これら九名の中津藩士のうち、姻戚関係等の明らかなものを示すと次の様である。

浜野丑之助（定四郎）は下士で砲術家の浜野覚蔵の子であるが姻戚関係は不明、三輪光五郎については、三輪丈助親義家と十太夫親仁家とあり、十太夫親仁は天保五年家督相続をしているが子供が記されていない。もう一方の丈助親義には親之彦八、真治郎、留三郎の三名の男子が記されていて、その可能性は強いが、誰れが光五郎かと批定し兼ねるので、一応除いた。(17)

小幡篤次郎家の叔父に、福沢が最も信頼した島津祐太郎があり、また服部浅之助の父でもある、服部五郎兵衛政肇が居る。服部五郎兵衛は、福沢が幼少の時漢学の手ほどきを受けた人である。

小幡杏平・貞次郎は兄弟で、その叔父は、福沢が帰省した時に相談した野本三太郎である。三太郎の祖母は、同藩下士片山東籬の娘であるが、片山家はもと同藩の染物屋であったが、その画才を認められて画師として下士に取立てられている。東籬の娘の一人は、福沢の父が特に親しくした中津藩の染物屋の男中村粟園の仲兄（清太郎）に嫁している。(13) 右の様

（┐印入塾者　・印伝記「小幡英之助先生」より補足）

小幡篤次郎家

七代
友直英之助久右ェ門
実木村権右ェ門重義四男
小幡半之丞直恭二女

- 女高木利大夫定安書
- 八代
  直温篤蔵
  文政五年家督
  天保五年隠居
  ・嘉永五年死
  奥平直記正中女
  - 九代
    直清文治郎
    実服部十郎右ェ門政敏三男
    天保五年家督
    直温妹
    - 女
      - 孫蔵早世
      - ・女
      - ・英之助
    - 女・三輪一彦妻
    - 某長次郎篤次郎
    - 某仁三郎
    - ・いと
- 女木村権右ェ門重一妻
  後桜井絞兵ェ次言妻
- 次真郁蔵
  ・竹下義十郎休閑養子
- 女岡見源太郎休閑妻
- 女早世
- 女兄篤蔵養子
  直清妻

篤次郎母実家奥平八郎右ェ門家

七代
正民吉左ェ門
実木村権右ェ門重義二男
吉左ェ門正邵長女

正中八郎右ェ門直記
文化八年家督
天保五年縁辺事件ニ付隠居
天保十二年死去
木村権右ェ門重明女

利民多門
佐藤多門弘道養子

女佐竹土太郎義質妻離縁

女小幡篤蔵直温妻

正直八郎右ェ門外記
天保五年家督
奥平列正方姉

女服部六蔵政肇妻

女恩田金兵ェ軌行妻

女嶋津祐太郎定一妻

正房・剛治郎
阿知波家養子

女沢渡半三郎盛美縁女

正武早世

正当・伝四郎
今泉家養子

篤次郎叔母島津祐太郎家

定常十右ェ門
佐竹儀左ェ門
義堅女

女喜多村弥十郎清妻
後津田半蔵以義妻

女菅沼散右ェ門定安妻

定一祐太郎
奥平直記正中女

女　女

服部浅之助家

- 政純五郎兵ェ実黒瀬市兵ェ尚武三男
  - 浅之助政諧女
- 政敏浅之助五郎兵ェ
  - 木村権右ェ門重明女
  - 正景奥平兵蔵正常養子
- 女早世
- 政肇六蔵・五郎兵ェ
  - 奥平直記正中女
  - 直清文次郎小幡篤蔵直温養子
  - 従寛三郎早世
  - 睿又四郎
  - 女・簗某妻
  - 女坂部某妻
  - ・惣九郎（後浅之助）
  - ・ふじ竹下郁蔵後妻
  - ・しか余瀬魯吉妻
  - ・きじ中村某妻
  - ・輝吉
  - ・六蔵

小幡杏平・貞二郎家

- 永島二戸清明
  - 恩地卯右ェ門正満女
- 行久恭平冥菴
  - 野本亮右ェ門晃光女
- 行著玄厚実時枝領白木原俊弟
  - 野本三太郎魚姉
  - 某弥六（克平弥）
  - 某貞二郎

小幡杏平母実家野本三太郎家

晁光亮右ェ門 雪巌
＝
片山東籬弘安女

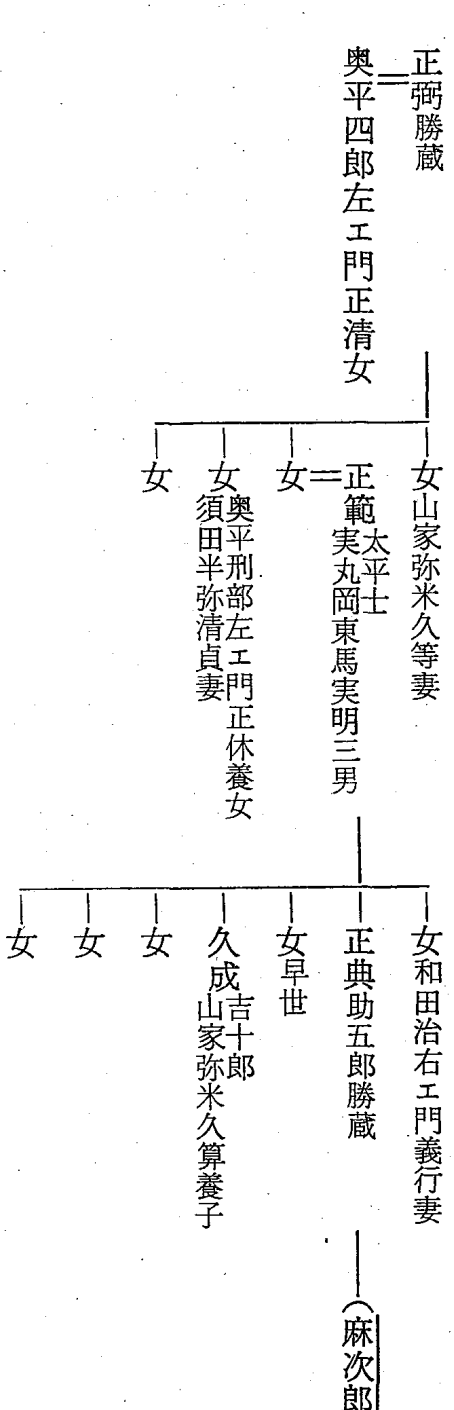
- 操早世
- 勇早世
- 女小幡冥菴行久妻
- 理武三白巌
  ＝
  松川源五ェ門知言女
  - 女小幡玄厚行著妻
  - 女木村仁右ェ門重光妻
  - 女
  - 魚三太郎
  - 女
  - 某次郎三早世
  - 女
- 女大久保次郎兵ェ教直妻
- 耕第二郎万春
- 女早世

和田克太郎・慎二郎家

義虎治右ェ門
＝
生田利右ェ門勝喜女

- 女佐竹太郎兵ェ義路妻
- 義比千蔵
  ＝
  猪飼太兵ェ正範女
  - 義行克之助、治右ェ門 実河野蔵之助通勝弟
    - 女
    - 女
    - 某克太郎
    - 某慎次郎
- 女早世

和田克太郎母実家猪飼勝蔵家



な関係から、福沢家と野本家が早くより親密な関係を持っ可能性は十分存したものと推定される。和田克太郎慎次郎の母の実家猪飼家は、[14] 和田兄弟の外祖々父にあたる勝蔵正弼は、かつて福沢百助の上司として、藩の借用証文に名を連ねているし、和田兄弟の外叔父勝蔵正典は、百助を尊敬し、百助が文政二年冬、郡方勘定人の役に就いていたとき、藩の収税士の弊害が改まり貢米の成績が向上し、その名声があがっているという意味の詩を贈っている。[15] これらの人達はその後も福沢と親しくした中津藩士である。

此の様にみて来ると、文久三年時の入門者を含めて、いづれも親戚に福沢が親しくしたであろう人達の名を見出す事が出来る。また前述の小幡篤蔵未亡人への養子云々の説得も、これらの人達の口添があれば、未亡人も納得する可能性がある様に思われる。

長く中津に帰省していない福沢が、突然帰省して、これら知人に相談するというよりも、帰省前にこれらの人達と十分

相談をし、それぞれの親戚等から適当と思われる青年の推薦をうけたうえで、福沢は帰省したのではなかったろうか。特に福沢が最も信頼し、その心中を十分打明ることの出来る島津祐太郎には、いち早く相談をし、そこに小幡篤次郎の存在を知り、此の人物に最大の期待をかけたから、篤次郎が嫌って隠れても、これを探し出して叔父達の助力をかりて説得したと推測すべきではなかろうか。斯く考えて来れば、元治元年の福沢の帰省の真の目的は、これら中津藩子弟の勧誘にあったとみるべきであろう。

八

文久三年春入門の小林小太郎を初筆とする入門帳については、史学第二十七巻、第二・三号において「慶応義塾初期入門姓名録について—鉄砲洲新銭座時代を中心として—」と題する小考において検討を試みたが、福沢が明治十六年に自から記した、慶応義塾二十五年史とも云うべき「慶応義塾紀事」のなかで、義塾の歴史は安政五年に始まるが、最初のころの記録はなく「一切の記事は文久三年正月より起て明治十五年十二月に終る」と述べ、義塾にとって文久元年という年が特別の意義を持っている年であると強調しているように思はしめるものがある。

文久三年に始まる義塾に関する記録としては、文久三年春入門の小林小太郎に始まる、姓名録と題する無罫美濃判の入門帳と、これと重複する部分を持つ、福沢氏或は慶応義塾の柱を持つ、入門者記載様式を木版で印刷した半紙判の入門帳がある。後者の始めの部分は、前者を写し直したもので、明らかに後期新銭座の入門者を中心にしたものであるから、無罫美濃判の入門帳が、義塾の最古の記録といわなければならない。

この最古の入門帳には慶応四年四月一日入門の仙台藩士伊東八十郎まで二七二名が記されているが、最初の部分で、元治元年六月入門の前記中津藩士六名の入門まで合計二八名の氏名が、同一筆跡で記入されていることから、この入門帳が

実際に使用開始されたのは元治元年六月と考えざるを得ない。

このころの塾の変化について、前記小考においては、

姓名録の書始められた文久三年の前々年暮、福沢は遣欧使節の翻訳方として旅立ち、多大の見聞を得て前年十二月中旬帰国したのである。『西航記』及び『滞欧手帳』によれば、欧州各地の学校を見学し、生徒数教員数学制といった点に相当注意を払っている。故にこの旅行を通じて福沢が自己経営の塾に対し何らかの抱負を持つことは予想される。この抱負を福沢は可能な範囲で実施せんと考えたのではあるまいか(16)

と推測するに止まっている。

入門帳については、福沢は既に緒方塾入門の際、自から署名していて、その様なものが学塾に存する事は知っていたのである。したがって、文久三年を初筆とする入門帳を此処に創設したということは、自から経営する学塾の永続的発展を希望する気持がそこに反映しているとみなければならない。前述もして来たように、福沢は、安政五年十月に出府開塾した当初においては、特別この一小家塾を永続せしめ様というような積極的な意志を持って居なかったのである。ところが英学に転じ幕府の外国方に出仕して、外国との接触を通じ、福沢は日本の立遅れを痛感し、英学振興の必要を次第に強く考えるようになり、文久元年には既に、中津藩の為にも藩が英学教育に積極的に乗り出す必要を痛感して、その旨を藩の要路に建言していたのである。

福沢のこの様な先見性のある考えは、彼が再度の外遊、即ち遣欧使節の随員の一人として、アジア諸国に寄港しつゝ欧州に到着するに至って、強い確信となったようで、ロンドンからの島津祐太郎宛の書翰となったのである。福沢はアジア諸国が欧州諸国の植民地として、欧州人に駆使されている状況を実見し、その原因が、何処にあるかについて悩み、欧州諸国の富国強兵の基本的原因が何であるかを考えたとき、それが国民の多くを組織的に教えている教育制度にあることに

気付いたのである。勿論日本にも学塾はあるが、漢学では欧米の先進文化に対応出来ない事は明白であり、我国の洋学は家塾又は私塾として、極く小規模な教育が行われているに過ぎない。それでは、欧米の先進国に対応して富国強兵による日本の独立を保つためには、余りにも宇遠である。此処において福沢は、藩が積極的に洋学教育に乗り出すべきであると主張するのである。

福沢は藩のため、日本のために大規模な人材養成こそが必要だとの信念を抱いて欧州から帰国した。しかし中津藩をとりまく状況は余りにも変化していて、福沢の希望は到底実現する見込はなかったのである。此処において福沢は自からの力で、大規模な英学校の経営を敢行しようと決意したのではないか。その際、余りにも急激に新規の理想を採用しても、国情に合わず慣習にもなじまないため、現実的に入門者が無くては無意味であるし、いきなり完全な近代的な私塾として出発することは出来ない。此処において、島津祐太郎らとも相談のうえと思われるが、家塾として或程度藩の援助を受ける形で出発し、次第に藩からの独立を達成し、近代的新しい学塾を創建して行くことを考えたのではなかろうか。

学塾の経営を或程度以上の規模とするためには、福沢の趣旨に賛成し協力する教授陣の育成と、一定規模の学生を収容出来る校舎が必要である。上下二十畳程の小家屋で、然も近々子供が生れるというのでは、余りにも塾舎としては狭い。丁度そのとき、中津藩の江戸屋敷の多くが空屋になった。中津藩士の江戸引払は、一旦は福沢の理想実現をはばむ条件になったが、着眼点を変えれば、福沢が望む一定規模の塾舎の入手を容易にしたのである。かくて福沢は文久三年の八―九月頃、五軒続きの長屋一棟を借用することに成功した。次の問題は、中心となって福沢をたすける教授陣の育成である。

勿論文久三年頃に英語の教授を他にもとめる事は困難である。したがって福沢の門に入塾して来る学生の中から、適当な人材を選出しなくてはならない。その場合単に学力人物という点で白羽の矢を立てても、その人物が直ちに福沢の希望通りに、福沢の学塾の教師になるとは限らない。それが他藩士であれば、その所属藩の都合に左右されることが多いはず

である。その様な事を考えると、一応の教員を確保するには、相当の年月を要することになる。しかし我国の置かれている状況を考えた場合、時間的にそれ程の余裕はない。出来るだけ速に一定数の教授陣や、学塾運営の協力者を獲得する必要がある。かく考えて来れば、最も確実に然も速かにそれらの人材を確保するのには、郷里中津藩士中にそれを求めることである。

此処において福沢は中津藩の同志の有力者を通じて、有為の青年を物色し、或程度の候補者を得て、これを実地に説得するという目的で、幕府出仕の公務を休み、既に入門している幾人かの入門者の教育を中断するという犠牲を払ってでも元治元年の三月末に江戸を出発して帰省したのではないだろうか。したがって折角期待した候補者を何としてでも説得しようとする積極的な行為が、嫌がる小幡篤次郎への叔父達を通じての説得になったり、母親への養子口があるというような説得になったのであり、しかも候補者の範囲も、島津祐太郎、服部五郎兵衛、野本三太郎、猪飼勝蔵らの姻戚が中心となり、或は浜野定四郎の如く、洋学に関係深い人の子弟に限定されたのであろう。

福沢の計画は一応成功し、六人の前途有望の青年を同伴して江戸に帰ることができた。これで、自からが経営して行こうとしている英学塾の前途に明るい見透しを持ち得たのである。そこにおいて、この近代的英学塾経営の決意の下に、教育しはじめた文久三年春入門の小林小太郎を初筆とする入門帳を作成したと推測することが出来るのではないだろうか。

事実福沢の期待通り、小幡篤次郎を始めとして、この六人の子弟は、義塾経営発展の上に極めて大きな働をしていることを思へば、後期鉄砲洲時代こそが、福沢が藩からの完全な独立を意図して、自から学塾経営に乗り出した時期であり、その一応の達成が、後期新銭座移転の初頭にみられた義塾の命名であるといえそうである。その意味で、慶応義塾一二〇年の歴史の中に占める、後期鉄砲洲時代の意義の大きさを評価し直す必要があるのではなかろうか。

く里方に帰還させ、かつ大身との個人的交渉を断絶しようとした事件である。

この事件の発生と山崎が密接な関係をもつことは結論としては通説にしたがって差支えないと思われるが、実際には最上層グループの全体的意志として表示されており、事実には検討の余地がある。今日でも事件の全貌は必ずしも明らかではないが、史料の上からは天保九年二月頃から問題が発生したようである。

として、篠田小十郎、田辺順之丞、磯田東太夫、中山八左衛門に対し、隠居退身減格禄の処分に処したと説明している。しかし後述の家中の「系図」によると、小幡篤蔵直温は「天保五年六月廿八日仲間共大身衆と縁辺指縺之儀ニ付重立申談候旨ニて隠居」を命ぜられ、服部家より文治郎が養子となり家督を相続している。又篤蔵の妻の父奥平正中も同じく天保五年に隠居を命ぜられている。菅沼善右エ門定儔も、大身衆縁辺指縺ニ付物頭役召放の処分を受けている。『中津市史』の説明と時期が一致しない点があるが、此処では「家系」書上によることとする。

(12) 『小幡英之助先生』によると、篤蔵は嘉永五年に死亡している。

(13) 『扇城遺聞』(赤松文二郎著)三九〇頁

(14) 『福沢諭吉年鑑』1、二二頁所収の「中津藩の藩債証書」(天保四年八月)、猶註に「猪飼勝蔵は塾員猪飼麻次郎の父」と

註

(1) 『百年史』上巻六頁

(2) 同　前上巻　一九二頁

(3) 『福沢諭吉全集』別巻　一五頁

(4) 「前期新銭座住居のころ」伊東弥之助「福沢手帳」16号一二頁

(5) 『福沢諭吉全集』第一七巻　七―八頁

(6) 同　前　第一七巻　三六―七頁

(7) 「文久三年御用控」(中津市立図書館蔵)六月条

(8) 同　前　九月廿九条に左の如く記している。

江戸表より御引越、築環様御内、御二男御娘二人〆五人、熊谷健太郎様御祖母御母御弟〆三人、足軽壱人中間両人、岡田米治様御母御弟、甲斐織江様御母御姉御弟〆四人、足軽壱人仲間二人……

(9) 『中津藩史』三七九頁

(10) 『福沢諭吉伝』(石河幹明著)第一巻　四二二～二四頁

(11) 『中津市史』は第六章中津藩と福沢諭吉の第三節御固番事件の項で、

縁辺事件とは天保九年二月大身の山崎織衛が、古来大身と供番とは互いに婚家を通じてきたが、自今以後大身の女子は供番と婚するをうるも、供番の児女は大身に嫁することをえざるものとすると声明したので、供番の武士はこれを聞き、その無礼を憤り、同盟して各自大身から娶った妻子をことごと

あるのは祖々父である。

(15)『福沢諭吉伝』第一巻　六頁、猪飼正典は麻次郎の父である。

(16)『史学』第二七巻二・三号　三三八頁

(17)三輪光五郎は江戸行の前日になって話があったと『福沢諭吉伝』第一巻四二五頁に記している。三輪は小幡篤次郎の姉の嫁した三輪一彦の弟に当るという。

本研究は慶応義塾学事振興資金による共同研究「『福翁自伝』の基礎的研究」の成果の一部である。